良好な対人関係に及ぼす性格特性・社会的スキルの効果について—自己評定データをもとに—[1)]

Effects of Personality Traits and Social Skills on Satisfactory Interpersonal Relationships : A Study through Analyses of Self-Rating Data.

水野邦夫
Midzuno Kunio

要　約

本研究では、性格特性が社会的スキルにどのように影響するか、また、Midzuno（2004）に示された、協調性、外向性、社会的スキルと良好な対人関係との関連についてのモデルが自己評定データでも同様の結果が得られるか、などについて検討を行った。186名の大学生に質問紙調査を実施し、5因子性格特性、社会的スキル、友人満足感に関する尺度への回答を求めた。分析の結果、まず、外向性や協調性のほかに、情緒安定性、知性も社会的スキルに関与する性格特性要因であることが示された。このことは、社会的スキルの多面性を表すものであると考察された。また、Midzuno（2004）のモデルについては、自己評定データでも確認され、外向性が良好な関係性に直接影響をしないという従来の仮説はさらに補強された。しかし、他の性格特性要因も投入した場合、外向性だけでなく、社会的スキルの関与も低減され、モデルの再構築の可能性が指摘された。

Key Words：5因子性格特性、社会的スキル、良好な対人関係、友人満足感

はじめに

我々は通常、社会的な場面において他者との関係を適切に処理しようとす

1) 本研究のデータの一部は、日本社会心理学会第45回大会（平成16年7月18日、於　北星学園大学）および日本心理学会第68回大会（平成16年9月13日、於　関西大学）においてパネル発表された。

るが、そうするためには、自身の意思や欲求だけでは充分ではなく、一連の技能が必要になる。このような技能は社会的スキル（Social Skill）と呼ばれ、社会心理学的な研究の中でも広く取り上げられてきた。社会的スキルには、さまざまな定義やとらえ方がみられるようではあるが（堀毛（1990）などに詳しい）、学習可能なものであると考える点は、多くの研究者間で一致するところであろう。

しかし、社会的スキルは単に学習性の技能というわけではなく、ある特定のパーソナリティ特性と強い関連を持つと考えられる。例えば菊池・堀毛（1994）は、「社会的スキルは、その人のパーソナリティとの結びつきを抜きにしては考えられない面があると思います（p. 12）」と述べており、外向性を「対人的に積極的に振る舞えるスキルを持っていること（p. 12）」と捉えている。また、尺度研究においても、社会的スキルを測定する尺度は、とくに外向性との関連が高いのがわかる（表１参照）。これらのことから、社会的スキルが学習性のもので、パーソナリティが安定的なものであると仮定するならば、外向性は社会的スキルを形成するための重要な要因であるといえよう。

表１　わが国の諸研究における社会的スキル傾向と外向性の関連性

岩淵・田中・中里（1982）：ＳＭ尺度とＭＰＩの社会的外向性尺度（Ｅ）の相関	.50（*N*=500）
菊池（1988）：Kiss-18とＹＧ性格検査の社会的外向性尺度（Ｓ）との相関	.56（*N*=111）
大坊（1991）：感情的コミュニケーション尺度（ＡＣＴ）とＭＰＩのＥ尺度の相関	.54（*N*=379）
石原・水野（1992）：改訂ＳＭ尺度とＹＧ性格検査のＳ尺度との相関	.36（*N*=341）
鈴木（1992）：KiSS-18とＭＭＰＩの社会的向性尺度（Si）の関連性：	.66（共感性も投入した際の標準偏回帰係数）（*N*=115）
水野（1993）：ＭＰＩのＥ尺度とＳＭ尺度の相関	.42（*N*=50）
水野（1997）：KiSS-18とＹＧ性格検査の社会的外向性尺度（Ｓ）との相関	.63（他者評定によるデータ）（*N*=405）

ところで、パーソナリティ研究では、性格の５因子説（Big Five Model）が提唱されている。これは、人の性格は５つの基本的な特性に集約することができるという考えであるが、研究者間で多少の違いは見られるものの、因子分析的研究では安定した５因子が得られている（詳しくは、辻（1991）などを参照）。わが国においても、柏木・和田・青木（1993）や村上・村上（1997）、下仲・中里・権藤・高山（1999）、辻（1993）、和田（1996）などの研究がみられ、性格特性の５因子構造の安定性が確認されている。しかし、少なくともわが国においては、これら５つの性格特性と社会的スキルの関連性を調べた研究はまだ少ない。そこで、本研究の第一の目的として、社会的スキルと５因子性格特性との関連性を検討することを目的とした。

次に、水野（2003）は、他者評定データに基づき、外向性は社会的スキルを形成する重要な要因となりうるが、良好な対人関係の形成には直接影響しないことを示している。またMidzuno（2004）は、同じく他者評定データをもとに良好な対人関係を構築するモデルについて検証しているが、外向性は社会的スキルを通じて間接的にしか、良好な関係性に影響しないことを明らかにしている（図１参照）。しかしその一方で水野（2003）は、他者評定データゆえのバイアスの恐れについても指摘している。そこで、本研究では、自己評定データをもとに、Midzuno（2004）のモデルを検証し、良好な対人関係に社会的スキルや外向性を含めたパーソナリティがどのように影響するかを調べることも目的とした。

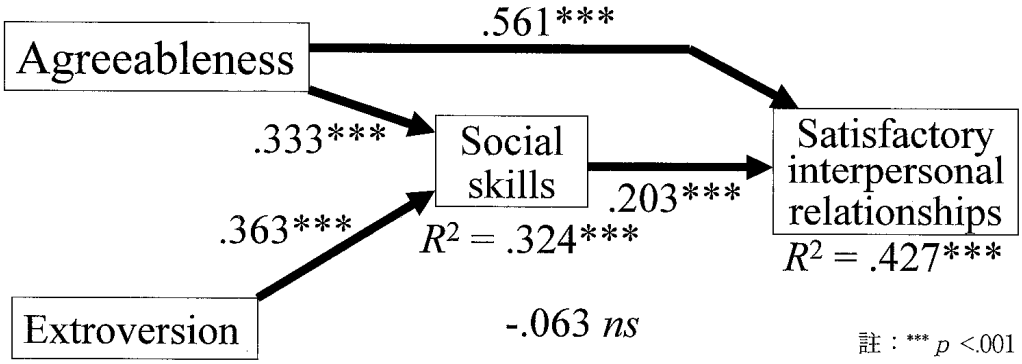

図１　協調性、外向性、社会的スキルと良好な対人関係に関するモデル（Midzuno, 2004）

方　法

被調査者　滋賀県内の大学または専門学校に在籍する学生に対し、下記質問紙への回答を依頼したところ、186名（男子91名、女子95名）がそれに応じた。

質問紙　以下の項目からなる質問紙を作成した。

1)主要５因子性格検査　村上・村上（1997）によって作成された５つの基本的性格特性を測定するもので、60項目からなる（原版では、建前尺度を入れた70問から構成されているが、本研究では、建前項目を省略した）。

なお、５つの性格特性を測定するのにこの尺度を選択した理由は、妥当性・信頼性の検討が適切になされていること、項目数が比較的少なく、回答者の負担が軽減されること（ちなみに、辻（1998）で発表されたFFPQは150項目、下仲ら（1999）のNEO-PI-Rは240項目）、水野（2004a）などでも因子構造の安定性が確認されていること、などによる。

2)KiSS-18　菊池（1988）によって作成された社会的スキルを測定する尺度で、18項目からなる。

社会的スキルの測定にこの尺度を選択した理由は、多くの研究において用いられ、信頼性や妥当性の高さが報告されていること（菊池, 2004）や、項目数が適切であることなどによる。

3)友人満足感尺度　加藤（2001）によって作成された友人関係においてどれだけ満足しているかを測定する尺度で、６項目からなる。

本研究では、この尺度を良好な対人関係が構築されている指標として用いたが、内的整合性が高いこと、尺度の項目数が適当であること、そして友人関係の満足感は、その人物が良好な対人関係を築いている表れと捉えられ得ることなどによる。

手続き　授業の一部を利用して、上記質問紙を配付し実施した。なお、いずれの問についても、５段階評定による回答を求めた。

結　果

尺度の因子分析　各尺度について因子分析を行った。なお、５因子性格検査

については主成分解、Promax回転、理論構成上の観点から５因子指定の分析を行った。因子パターンと因子間相関を表２に示す。表２より、若干の異なる点があるものの、村上・村上（1997）の結果とほぼ対応したものとなっているのがわかる。

KiSS-18と友人満足度についても同様の因子分析を行った。しかし、KiSS-18は、第１因子の説明率が35.03％であったが、第２因子以降の固有値は概して低い（３～８％程度）ことから、また友人満足感尺度は、第１主成分（因子）の説明率が52.59％もあることから、それぞれ１因子性のものと判断し、１因子解を求めた。

なお、以下の分析では各因子の標準因子得点を変数として用いた。また、欠損値のあるオブザベーションを除外したため、最終的には、172名（男子83名、女子89名）のデータを分析対象とした。

社会的スキルと性格特性の関連　次に、社会的スキルと５因子性格特性がどのような関係にあるかを検討するために、両者の相関係数を求めた。また、先にも述べたように、社会的スキルが学習性のもので、パーソナリティ特性が安定的なものであるという仮定に立ち、社会的スキルを目的変数、５つの性格特性を説明変数とした重回帰分析（一括投入方式）も行った。その結果を表３に示す。表３から、社会的スキルには勤勉性を除いた４つの因子が有意に関連していることがわかる。また、係数値を見る限りにおいては、外向性のほかにも社会的スキルに強く関与する性格特性（とりわけ、知性と協調性）が存在することも明らかとなった。

自己評定データに基づくモデルの検証　Midzuno（2004）は他者評定データをもとに、図１のモデルを導出しているが、他者データの場合にはデータに偏りができ、いわゆる切断効果を引き起こすことで、バイアスが生じている恐れがある（水野, 2003）。そこで、図１のモデルについて、外向性因子、協調性因子、社会的スキル、良好な関係性をあてはめてパス解析を行った。その結果を図２に示す（なお、図１における各変数と図２のそれは必ずしも同一の指標で測定していない）。図２より、自己評定データでも、外向性から

表２　主要５因子性格検査の因子パターンおよび因子間相関

項目番号	村上・村上(1997)による分類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	h^2
48	N	**.802**	-.076	-.153	.012	-.081	.694
22	N	**.796**	-.055	-.117	-.031	-.096	.659
8	N	**.771**	-.034	-.156	.108	-.004	.651
53	N	**.725**	.036	.107	-.037	.137	.572
12	N	**.724**	.018	-.073	.262	-.001	.616
24	N	**.719**	.041	-.006	.119	-.039	.528
38	N	**.676**	-.003	.180	-.035	.116	.523
27	N	**.662**	-.081	.204	.055	.166	.563
17	N	**.642**	.052	-.106	-.084	-.041	.405
20	O	**.509**	.058	-.377	-.015	.074	.406
41	O	**.436**	-.006	**-.409**	-.131	-.073	.370
57	N	**.400**	-.119	.027	-.055	.366	.387
58	C	.168	-.073	.007	.031	-.046	.039
16	N	**-.616**	-.046	-.145	.063	-.061	.403
15	N	**-.806**	-.083	.135	-.017	.269	.672
10	E	.095	**.784**	-.071	.188	.090	.710
3	E	.027	**.721**	.074	-.033	.166	.528
49	E	.034	**.670**	.073	.165	.123	.548
18	E	.023	**.623**	.072	.337	.003	.642
45	E	-.019	**.616**	.145	.246	-.022	.583
35	E	-.129	**.579**	.061	.285	.055	.565
34	E	.017	**-.586**	-.172	.237	.086	.370
4	E	-.037	**-.594**	-.058	-.070	.101	.406
21	E	.104	**-.712**	-.106	.177	.120	.548
13	E	-.015	**-.739**	-.193	.215	.064	.553
32	E	.007	**-.814**	.072	.122	.065	.621
51	E	.005	**-.835**	.018	.107	-.085	.652
52	O	-.035	.048	**.733**	-.015	-.163	.570
40	O	.007	.197	**.608**	-.148	-.115	.438
47	C	-.148	-.109	**.604**	.113	-.047	.390
50	O	-.056	.159	**.602**	.004	-.086	.421
36	O	.053	.167	**.589**	.108	.074	.418
28	O	.163	.201	**.569**	-.180	.032	.406
46	O	-.125	.026	**.568**	.248	.086	.405
7	O	-.045	.054	**.506**	.146	.036	.293
44	C	-.063	-.119	**.472**	.088	-.345	.351
19	C	.037	.225	**.463**	.019	-.138	.304
54	A	.169	-.099	.386	-.317	.293	.448
29	A	.100	-.053	.314	-.317	.265	.336
1	C	-.076	.354	-.398	-.054	**.401**	.399
30	O	.074	.061	**-.624**	.126	.397	.540
14	A	.050	-.178	.108	**.802**	-.007	.605
5	A	-.009	-.152	.126	**.720**	-.028	.492
59	A	.104	.010	.076	**.705**	.024	.519
56	A	-.019	-.192	.081	**.693**	-.077	.460
42	A	.126	.121	.049	**.616**	-.047	.475

31	O	.110	-.037	.249	**.596**	.229	.430
60	A	.042	.193	-.266	**.510**	-.082	.448
23	A	.180	.110	-.134	**.501**	-.175	.409
37	O	-.198	.168	.227	**.438**	.183	.359
11	C	.197	.120	.270	.325	-.080	.271
43	A	.142	.041	.029	-.278	.162	.137
39	A	.112	-.061	.127	**-.613**	-.005	.424
55	C	-.089	.041	-.163	.014	**.782**	.614
25	C	-.005	.051	.030	.050	**.751**	.552
26	C	.057	-.020	-.147	-.035	**.608**	.412
9	C	-.132	.182	-.302	.012	**.568**	.418
33	C	.130	-.201	.032	-.208	**.564**	.538
2	C	-.258	-.122	-.262	-.123	**.417**	.336
6	A	.263	-.174	.302	-.227	.322	.438
寄与		6.987	6.672	5.434	5.413	3.768	28.273

因子間相関

	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ	-.208	-.013	.050	.133
Ⅱ		.089	.315	-.072
Ⅲ			.001	.028
Ⅳ				-.205

註１：Ｎは情緒安定性（ただし、標準因子得点が高いほど不安定）、Ｅは外向性、Ｏは知性、Ａは協調性、Ｃは勤勉性をそれぞれ表す。
註２：ゴシック太字は、因子負荷量の絶対値が.40以上であることを示す。

表３　社会的スキル（KiSS-18）を目的変数とした重回帰分析の結果

情緒安定性	外向性	知　性	協調性	勤勉性	R^2
-.205***	.381***	.454***	.383***	.000	.716***
-.268	*.589*	*.500*	*.548*	*-.122*	

註１：*** p <.001
註２：各変数の上段は標準偏回帰係数、下段斜体はKiSS-18との相関係数をそれぞれ表す。

良好な関係性（友人満足感）へのパスに有意な差はみられず（ただし、有意差の傾向はみられた）、ほぼ同様の関係になっていることが認められよう。

ところで、表３から、社会的スキルに関与する性格特性要因は、多様であることが明らかになった。そこで、良好な関係性を目的変数、社会的スキルと性格特性を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果を表４に示す。

表４から、協調性と情緒安定性については、他の要因を統制しても、良好な関係性に強く関与し、逆に社会的スキルや外向性は他の要因を統制すると、良好な関係性にはあまり関与しないことがわかる。

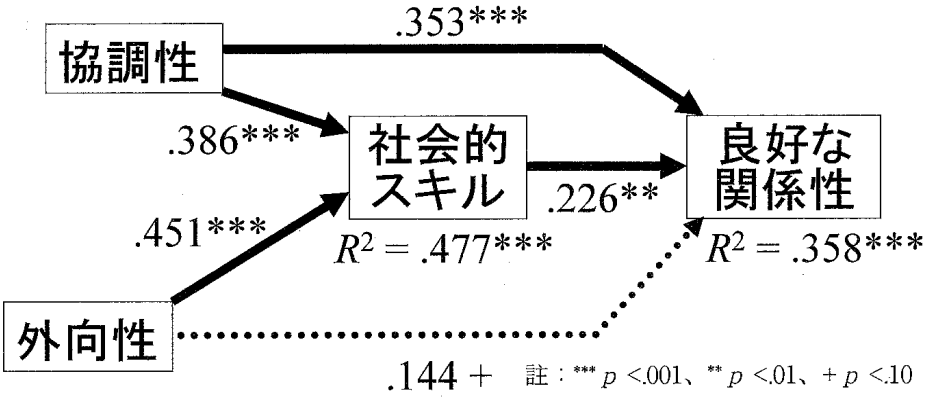

図２　自己評定データに基づく、Midzuno（2004）のモデルの検証

表４　良好な関係性（友人満足感尺度）を目的変数とした重回帰分析の結果

情緒安定性	外向性	知　性	協調性	勤勉性	社会的スキル	R^2
-.228***	.131+	.022	.382***	-.118+	.123	.424***
-.305	*.403*	*.111*	*.528*	*-.246*	*.504*	

註１：*** p <.001、+ p <.10
註２：各変数の上段は標準偏回帰係数、下段斜体は友人満足感尺度との相関係数をそれぞれ表す。

考　察

本研究では、まず、社会的スキルに性格特性要因がどのように関与するかについて調べた。社会的スキル（KiSS-18）を目的変数、５つの性格特性（情緒安定性、外向性、知性、協調性、勤勉性）を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、勤勉性を除く４つの性格特性が社会的スキルと関与することが示唆された。社会的スキルと外向性の関連性の高さについては、先に記したように、多くの研究で主張され、また確認もされているが、本研究では、知性や協調性も高く関与しているという結果が得られたのが特徴的である。これらのことから、社会的スキルはさまざまな性格特性との結びつきが強い、多面的な技能であるといえよう。相川・佐藤・佐藤・高山（1993）は、従来の研究などを参考にしながら、「社会的スキルの生起過程モデル」を提唱し、社会的スキルを包括的に説明している。それによれば、社会的スキルは、相手の対人反応の解読、対人目標の設定、感情の統制、対人反応の決定、対人反応の実行という過程を経、しかも個人内のデータベースを随時参照し

ながら認知や行動を修正していくものであり、実に複雑な過程であることを示している。それゆえ、さまざまな性格特性が社会的スキルに関与することは、むしろ当然なことであり、逆に外向性だけが社会的スキルの規定要因であるという見方は無理があるといえよう。

また勤勉性については、社会的スキルへの関与がほとんど認められなかったが、勤勉な性格は相手を信用させるという点では安心感を与えるかもしれないが、場合によっては行動を硬直化させることになり、必ずしも社会的スキルの発揮にプラスやマイナスの関与をもたらさないことが原因となっているのかもしれない。

ところで、水野（2004b）は同様の分析を行っているが、そこでは社会的スキルに対する知性の関与が認められていない（β = .061 *ns*）。知性が関与するかどうかについては、今後も慎重に検討する必要があろう。

次に、外向性、協調性、社会的スキルと良好な関係性に関するモデルは、Midzuno（2004）と同様に、良好な関係性に及ぼす外向性の直接的な効果はほとんどみられなかった。自己評定データによる検討でも同様の結果が得られたことは、外向性が良好な対人関係をもたらすことに、直接的には関与しないという水野（1996, 1997, 1998, 1999, 2001, 2003, 2004a）の説がさらに補強されたといえるであろう。

しかしその一方で、そのモデルに想定していなかった他の性格特性因子（情緒安定性など）をモデルに投入することで、外向性のみならず、社会的スキルの効果も低減されたことから、今後はモデルの再構築が必要になるかもしれない。

引用文献

相川　充・佐藤正二・佐藤容子・高山　巌　1993　社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱　宮崎大学教育学部紀要（教育科学）, **74**, 1-16.

大坊郁夫　1991　非言語的表出性の測定：ＡＣＴ尺度の構成　北星学園大学

文学部北星論集, **28**, 1-12.

堀毛一也　1990　社会的スキルの習得　斎藤耕二・菊池章夫（編著）　社会化の心理学ハンドブック　川島書店　Pp. 79-100.

石原俊一・水野邦夫　1992　改訂版セルフ・モニタリング尺度の検討　心理学研究, **63**, 47-50.

岩淵千明・田中国夫・中里浩明　1982　セルフ・モニタリング尺度に関する研究　心理学研究, **53**, 54-57.

柏木　繁・和田さゆり・青木孝悦　1993　性格特性のBig Fiveと日本語版ACLの斜交基本因子パターン　心理学研究, **64**, 153-159.

加藤　司　2001　対人ストレス過程の検証　教育心理学研究, **49**, 295-304.

菊池章夫　1988　思いやりを科学する　川島書店

菊池章夫　2004　KiSS-18研究ノート　岩手県立大学社会福祉学部紀要, **6**, 41-51.

菊池章夫・堀毛一也　1994　社会的スキルとは　菊池章夫・堀毛一也（編著）社会的スキルの心理学　川島書店　Pp. 1-22.

水野邦夫　1993　セルフ・モニタリング尺度の構成概念妥当性について　文化学年報（同志社大学文化学会）, **42**, 34-51.

水野邦夫　1996　外向者は対人関係を柔軟に処理できるか　同志社心理, **42**, 23-31.

水野邦夫　1997　対人関係における外向性の直接的効果について　聖泉論叢, **5**, 63-75.

水野邦夫　1998　関係初期の好感度に及ぼす行動特性・社会的スキルの効果　日本社会心理学会第39回大会発表論文集, 220-221.

水野邦夫　1999　対人的好悪感情と対人認知の関連について　聖泉論叢, **7**, 55-68.

水野邦夫　2001　対人的好悪感情の変化に伴うパーソナリティおよび社会的スキル認知の変化について　行動科学, **40**, 9-18.

水野邦夫　2003　社会的スキルに影響する特性要因についての検討－外向性

は社会的スキルの主要因か？－　行動科学, **42**, 99-102.

水野邦夫　2004a　対人場面における好意的感情と外向性の関連性について－外向性は「好ましい性格」か？－　聖泉論叢, **11**, 13-25.

水野邦夫　2004b　良好な関係の形成に及ぼす性格特性・スキルの影響について－自己認知の観点による友人満足度への性格特性・社会的スキルの関与－　日本心理学会第68回大会発表論文集, 205.

Midzuno, K. 2004 Is extroversion a "desirable" trait? Poster presented at the 28th International Congress of Psychology. Beijing, China. (*Abstracts*, 3118.113)

村上宣寛・村上千恵子　1997　主要５因子性格検査の尺度構成　性格心理学研究, **6**, 29-39.

下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山　緑　1999　日本版NEO-PI-R, NEO-FFI使用マニュアル　東京心理

鈴木隆子　1992　向社会的行動に影響する諸要因―共感性・社会的スキル・外向性―　実験社会心理学研究, **32**, 71-84.

辻　平治郎　1991　パーソナリティの５因子説をめぐって　人間科学年報（甲南女子大学）, **16**, 59-84.

辻　平治郎　1993　性格の５因子モデル：その構成概念の検討　人間科学年報（甲南女子大学）, **18**, 3-15.

辻　平治郎（編）1998　５因子性格検査の理論と実際　北大路書房

和田さゆり　1996　性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成　心理学研究, **67**, 61-67.